

Labitzke とのディスカッションで教えられたのは、データを見る時の基本姿勢である。NMC や ECMWF の解析による全球データを扱う場合、最初から緯度・経度の格子点に数値が入っており、あたかも、全球で均質な観測が行われているかの如き錯覚をする場合がある。陸上と海上では観測密度が大きく異なっており、いくら衛星観測の助けを借り最高の内挿法を用いたとしても、空間的に均質なデータとはなっていない。取り上げる問題によってその影響は異なるであろうが、常に気をつけておく必要がある。南半球のデータ解析の話をした時、さっそく天気図を持ち出して、「ここはこれだけしか観測点が無いのだから、気をつけて結果を見なければいけない。」と注意された。

ケルン大学には地球物理学及び気象学教室があり、A. Ebel を訪ねた。彼の下には2人のポスドクと何人かの大学院生がいて、重力波のロケット観測や数値モデルなど主に中層大気力学の研究をやっている。彼は地球内部のマントル対流にも興味を持っていて、高 Prandtl 数での2次元対流の数値計算をやっている学生もいた。「地球物理学及び気象学」の名前通りである。

Ebel は、京都大学 超高層電波研究センターの客員教授として、来年秋より日本に滞在の予定である。独語で書かれた日本語会話の本を持ち出して、練習の成果を披露してくれた。異なる文化・伝統の国、日本への訪問旅行を楽しみにしている様子である。

ミュンヘン大学の J. Egger とはワシントン大学で教

週間一緒だったこともあり訪問日程に加えていたのだが、ちょうど彼の中国出張と重なってしまい会うことができなかった。彼の率いる理論気象グループの W. Mets, H. Schilling, G. Hartjenstein と話をした。ここには、Egger の他に、衛星気象と境界層の教授がいる。

ドイツの大学を訪ねて受けた印象は、英国や米国と比較して、教授が突出して偉く、ポスドク連中がそれ程上昇指向でないということである。これはおそらく大学制度の違いから来るのではないかと思われる。ハビリタチオンという教授資格試験があり、学位取得後に教授になれるコースと研究者になるコースに分かれていて、各人の研究に対する取り組み方にも強く影響を及ぼしている様子である。若い世代が積極的な分だけ英国の大学のほうが生き活きとしていたように感じられた。(但し、夏休み期間中に数日間ずつ訪問しただけなので、結論づけるのは危険であるが。)

今回、会議だけでなく大学・研究所をあらちこち訪問できたのは、日本学術振興会の海外特別研究員としてワシントン大学に滞在中だからである。長期の出張を許していただいている廣田勇教授と京都大学の気象学関係の先生方に心より感謝します。また、J. Holton 教授の研究費援助(ワシントン大学に於ける)があっはじめて旅費を捻出することができたので、あわせて感謝します。

## 熱帯域における微気象と大気汚染に関する国際シンポジウムのお知らせ

日 時：1988年2月

場 所：インド，ニューデリー

発表募集課題：

- (1) 人口密集地域に有毒物質が放出された時の処置
- (2) 大工業地帯からの汚染物質の監視とモデリング
- (3) 熱帯における各種エネルギー使用による大気汚染
- (4) 熱帯における大気・海洋上の境界層の特性

興味のある方は下記に問い合わせ下さい。

Prof. M.P. Singh

Centre for Atmospheric Sciences

Indian Institute of Technology

Hanz Khas

New Delhi—110016 India